る事が出來ます。

病氣は何處より來るか、神よりか、惡魔よりか、此事については種々の說があります。或人はこれを神より來るといひ、或人は惡魔の行爲であると申します。もし一方を拒くるやうな思想を有て居るなれば、双方とも間違ふて居ります。此問題については兩方面あることを受入るゝなれば双方とも正しいのであります。私共は病氣が惡魔より來ると申しますけれども、其が神の許なくば存在し得ざるものであると信ずる者であります。惡魔の力は壓迫者としての力であるが、彼自身としては人間を攫み又攻擊し得る權力のあるものでありません。彼が人間に何か打掛つて來る事があるとすれば、サタンに全く降參する人が其配下となつた事を神は其義を以て布告なし給ふ時に其が事實となるものであります。





サタンは暗黑と罪の王國の王であります。病氣は罪の給果であります。そこで罪ある人の肉體の上に惡魔の權威が顯はるゝ事になるのであります。彼は此世の主である事は神にも認められ、これが滅亡され、遂出さる時までに至るのであります。從つて彼の配下に居る者の上に或力を有して居ります。病氣を以て人を苦しめて神より離れしめ滅亡するやうにする者は彼であります。

しかしサタンの能は全能でなく、また其能は神の許なくば何の役にも立ぬものであると私共は言ひたいのであります。神は彼に許して人間を（信者をも）誘惑させます。しかし其試練によりて聖潔に至らす爲であります。サタンは死の權威を有て居ると申してあります。（來二〇十四）。彼は死の働くところには何處にも居ります。しかし彼には神の聖旨によらずに

神の僕の死を決定する權力がありません。病氣でも然です。罪の故を以て病氣は惡魔の業であります。しかし此世の最高の命令は神に屬するものである故を以て、病氣は神の御業であるとも言るのであります。ヨブ記を熟讀して居る人々は誰でも此事が其書の中に明白に記されてある事を知るものであります。如何なるものが病氣の必然の結果でありませうか。其結果の善か惡かは、神か或はサタンか、どちらかゞ私共に勝利を得る事によりて定ります。サタンの勢力の下にあれば病者はいよ〳〵深く罪に這入ります。かゝる人は懲治の原因として罪を認めず、たゞ苦痛に占領せられて終ひます。彼は醫癒の外何物をも求めず、罪から救はるゝなどの事は夢にも見ません。しかし其反對に、神が勝利を得て居る人は自己を棄て、神に從ふやうになります。ヨブの生涯はこれを證明して居ります。彼の友等は彼





が非常の罪を作つた爲に其恐るべき苦難が來つたのであると無暗に彼を攻めつけました。神はヨブに就て「彼のごとく完全かつ正くして神を畏れ、惡に遠ざかる人世にあらざるなり」(伯二〇三)と證したまへる事を見ると、彼等の言ふごとくでなかつたのであります。しかしヨブは自己を辯護する爲に餘り言過しました。彼は神の前にいよ〳〵謙遜り又隱れたる罪を認むる代りに、己が義を立てゝ自己を義しき者にせんと努めたのであります。神が彼に顯はれた時に、彼は「是を以て我自ら恨み塵灰の中にて悔ゆ」(伯四十二〇六)と言ふ其時までは然であつたのであります。彼にとりては病氣は彼が新しき法に於て神を知り、また神の前にもつと自分を謙遜すところの大なる恩惠でありました。此恩惠は私共も神が病氣を以て私共をうつ事を惡魔に許し給ふ時に與へんとするところの恩惠であります。

此目的は病者が全く自己を神に献ぐる時に達せらるゝのであります。

如何にせば私共は病氣から救はるゝでせうか。父は必要以外に永く其子を懲しはいたしません。神もまた病氣に罹る事を許す其目的を果すために必要なる事の外に永く懲すやうな事をなさいません。ヨブは自己を責め、神が御自身を彼に示し給ふ所の事を聽てから、塵灰の中に伏て悔改めた其時から、彼は神を諒解したのであります。神はサタンの手から彼を救ひ出し彼の病氣を癒し給ひました。

今日に於ても病者は神が懲治をする御目的を明かに知り、また其御目的が達せらるゝのは、聖靈が其人をして罪を告白せしめ又棄しめ、又主の御用に當るために全く献身さへすれば直に出來る事を知つて貰ひたいものであります。さすれば懲治が必要でなくなり、主は其人を救ふやうになるの





であります。神は恰も政府が獄屋の番人を用ふるやうに惡魔を用ひ給ひます。神は其子等を定められたる時の間だけ惡魔の權力のもとに置き給ひます。其後には私共はサタンに打勝ち、また私共の罪を負ひ給ふてサタンの領地より私共を援け出し給ひし救主と自由なる交際に入るやうになるものであります。

# 第三十章　信仰より出る祈禱

「それ信仰より出る祈禱は病者を救ふべし主これを起さん」(雅五〇十五)。信仰より出る祈禱！　この言は聖書にたゞ一度しか出て居りません。しかも其は病者の醫癒に關するものであります。教會は此言を用ひて居りますが、信仰より出る祈禱といふものに依賴むのでなく、他の恩惠を受る爲に用ひて居ります。聖書によればこれは特に病者の醫癒に關するものであります。

使徒ヤコブは信仰より出る祈禱によりてのみ病氣が癒さるゝと思ふて居たのでせうか。或は其とともに醫藥も必要であると思ふて居たでせうか。これはよく耳にする質問であります。若し私共が初代教會に於る靈的生





活の能力を考へて見るなれば、是は容易に解決し得るものであります。使徒等が主より授けられたる醫癒の賜は聖靈の傾注に伴ふて加へられたるもので（徒四〇三十、五〇十五、十六）、これはまたパウロが「同じ靈に由て病を醫す能を賜り」（哥前十二〇九）と言はれたものであり、ヤコブは信仰につける待望について讀者を奬勵せんとてエリヤの祈禱と神の驚くべき應答について主張したるところのものであります。（雅五〇十四―十七）。これは信者が信仰より出る祈禱によりてのみ醫癒を望み得るもので、醫藥を加へずともよいといふ事を明白に示すものでありませんか。

また別な質問が起ります、醫藥を用ふる事は信仰より出る祈禱を疎外しますまいかと。これに對して私共はかく答へます。否、多の信者の經驗に由て見ると、神は屢々祈禱の答として其用ふる藥を祝し、其を醫癒の一

方法となし給ふた事を證して居ります。

次に第三の質問が起ります。私共は確信を有ち、神の聖旨に循ひ、信仰より出る祈禱の有効なる事を證明する爲にどの道を取るべきでありませうか、ヤコブ書に基き諸の醫藥を棄べきでせうか、或は多の信者がやるやうに醫藥を用ふべきでせうか、一言にしていへば信仰より出る祈禱によりて神の恩惠を受るには醫藥を用ふべきか、用ふべからざるかであります。此二の方法の中、どちらが最も的面に神の榮光を顯はし、また病者にとりて恩惠となるかであります。若もヤコブ書にある命令と約束が現時の信者に應用るものとすれば、今の信者は昔時の信者に與へられたる恩惠を同じく戴き、凡の點に於て彼等に倣ふべきで、神癒のみを望み、其が爲に神と直取引をなし、別に醫藥の助を借らずに、其恩惠を受るものであると、い





と無造作に答ふべきであります。事實上聖書はかゝる意味にて力ある祈禱或は信仰より出る祈禱について常に申して居るのであります。

自然法と聖書の證は神が屢々其榮光を顯はす爲に仲間に立つ者を用ふる事を示して居ります。しかし實驗と聖書に由て見ると人間は墜落の結果として、神の直接の御業よりも尙多く醫藥に賴むといふ傾向がある事を私共は認めます。醫藥なる物は神の臨在を遮り、神より私共を離らするやうな事が屢々起ります。かくして私共を神に導くべき筈の自然物と自然法は反對の結果を來らす事になるのであります。これは即ちアブラハムを其選み給へる民の父たらしめんとて召出し給ひし神が自然法の助を借りなかつた理由であります。(羅四〇十七—二一)。神は御自身の爲に眼に見ゆる物よりも眼に見えざる物を宛にして居る信仰の民を有て居られます。彼等

を其生涯に入れしむる爲には有觸れたる方法に對する信頼を取除く必要があるのであります。神はアブラハム、ヤコブ、モーセ、ヨシア、ギデオン士師、ダビデ又は其他の多のイスラエルの王等を導くために、神が自然界に置き給ふた普通の道を以て爲し給はなかつた事を私共は見るものであります。神の目的は彼等をして神そのまゝを知る爲に神にのみ信頼せしめんと敎へんとし給ふたのであります。「なんぢは奇きみわざをなしたまへる神なり」(詩七十七〇十四)。

神は同じ道を以て私共を待ひ給ひます。私共はヤコブ書五章の命令に循ひて行む事を求め、眼に見ゆる一切の物(哥後五〇十八)を振棄て、神の約束を握つて、求むる所の醫癒を神より直接に受る時には、世の醫藥に頼るのが必要であるか否やを悟ることが出來ます。世には醫藥を用ひて





も其靈的生活に何の害をも受ずに居る基督者がある事は事實です。しかし信者の大多數は神の能よりももつと醫藥に依頼むやうになるものであります。神の御計畫は神の子供等をして基督のもつと親しき交際に入らしめ給はんとするのであります。かゝる事は信仰によりて私共が神の臨在に全く頼り、無上主權の醫し主として神に自已を託ぬる時に起るところのものであります。醫藥を捨て超凡の態度を以て信仰を働かすなれば醫癒は病氣そのものよりも遙かに優りて數知れぬ靈的恩惠の源となるものであります。これによりて何か信仰によりて出來るといふ事が事實となり、神と信者の間に新しき結が出來、また信頼と服從の生涯が其中に始めらるゝやうになります。肉體は靈魂とともに聖靈の配下に置かれ、信仰より出る祈禱は病る者を救ふといふ事によりて私共は信仰の生涯に入り、神は私共

の地上の生涯に於て其御臨在を顯はし給ふ確證によりて信仰が強めらるゝのであります。





# 第三十一章　主の名に託て膏を沃ぐ事

「爾曹のうち誰か病る者ある乎あらば教會の長老等を招くべし彼等主の名に託て膏を沃ぎ之が爲に祈ん。」（雅五〇十四）。

「主の名に託て膏を沃ぐ」、此言は爭論を惹起したものです。或人は此聖句を捕へて、これは醫藥を用ひずに信仰より出る祈のみを爲すべき事を命じたのでないとして、寧ろ其反對に使徒ヤコブは醫藥として膏を用ひたので、主の名に託て膏を沃ぐ事は膏を以て患者を摩擦するより外に意味のないものであると論じます。しかし此命令は諸の病氣の場合に適用するものであります。かく膏を沃ぐといふ事は諸の病氣に對して奇跡的價値のあるものであります。此事につき聖書は何と敎へて居るか、如何なる意味のも

のであるかを知りたいものであります。

東方の國に於ては湯に這入てあがつてから膏をば身體に塗るといふ習慣がありました。これは熱い國に在ては極めて氣持のよいものであつたさうです。また神に召れて特別なる奉仕をする者は膏沃がれて其献身の表となし、其使命を果す爲に神より受たる恩惠の表となしたるものでありました。かく祭司のため又幕屋のために用ひられたる膏は「いと聖きもの」(出三十〇二二—三二)として見られたるものでありました。聖書中に膏沃ぐとある所を見ると、悉それは聖潔と献身の表號であります。聖書の何處にも膏が醫藥として用ひられたることを示して居るものはありません。

膏を沃ぐといふ事は惟一度だけ病氣に關係して記されてあります。しかし其は宗教的儀式として用ひられたる事が明白であつて、醫藥として用ひ





られたものでありません。「また多の惡鬼を逐出し又多の病る者に膏を沃て醫しぬ」(可六〇十三)。此處を見ると病氣の醫癒と惡鬼を逐出す事は並行して居ります。これは奇跡的能力の結果であります。これは主耶蘇が其弟子等を二人づゝ遣はした時に命じたるところのものでありました、「偖イエスその十二弟子を召彼等に汚れたる鬼を逐出し又すべての病すべての疾を醫す權を賜へり」(太十〇一)。彼等に鬼を逐出しまた病氣を醫すやうにしたるところのものは同じ能であります。

此十二弟子によりて實行せられたる膏沃ぎは何を型取たものであるかを發見したいものであります。舊約聖書に於ては膏は聖靈の賜の表であります。「主エホバの靈われに臨めりこはエホバわれに膏を沃ぎ」(賽六十一〇一)とあります。また新約聖書に於ては「此ナザレより出たるイエスは神

より聖靈と才能を以て膏を沃がれ」(徒十〇三八)とあり、又信者について
は「爾書は既に聖主より膏を沃れて一切の事を知」(約壹二〇二十)とあり
ます。人間は時として其感情を滿足するために或有形的の徴の必要を感ず
る事があります。其によりて其信仰を強むる助となり、心靈的の意味を握
り得る助となる事があります。されば膏を沃ぐ事は醫癒を賜ふ聖靈の御
働を病者に示すところの表號となるのであります。
然らば信仰より出る祈禱とともに膏沃ぐ事も必要でありませうか。さう
命じたのは神の聖言であります。醫癒を求るところの人の多が膏を沃いで
貰ふ事はこの命令に從ふためであります。これは是非さうせねばならぬ爲
でなく、諸の事に於て神の聖言に從ふといふ事を顯はす爲であります。主
耶蘇が與へ給ふた最後の約束の中に、醫す能を與ふる爲に膏を沃ぐのでな





く、手を按くことを命令して居ります。(可十六〇十八)。パウロがテモテに
割禮を授け、持別なる誓願を立たのは、福音の自由が害せられない範圍に
於て舊約の儀式を守る事に反對せざる事を證明する爲でありました。かゝ
る意味で、エルサレムの教會の首なるヤコブは先祖等の遺されたる制度を
守ることに忠實であり、聖靈の御制度に從ふたのであります。されば私
共もかくする事は醫藥としてゞなく、聖靈の大なる能力の保證として、信
仰を強むる方法として、病者と膏を以て其人に沃ぐ教會の會員との間にあ
る接觸と交際の爲であります。
「我はエホバにして汝を醫す者なり」(出十五〇二六)。

# 第三十二章　我等の高き特權と全き救

どうか路加傳十五章を御覽下さい、而して三十一節を御讀み下さい、「父かれに曰けるは子よ爾は常に我と共に在また我所有は皆なんぢの屬なり」。

餘程以前私はナルスフィルドに參りました時にムーデー氏より左の事を聞きました。彼は二年前に英國のケゼックで聞たうちの最も善物は、或教役者が別るゝ時の說教題として引照したる此聖句であつたと申されました。彼は「何故に私はこれまで此事に氣が付かなかつただらう」と獨語した程でありました。

私共は放蕩兒に對する父の愛については多く語もし、また書もします。しかし其兄息子に對する父の態度について考ふる時には父の驚くべき愛に





就て眞の意味を私共の心に悟る事が出來ます。されば私は此聖句に就て語りたいのであります。此處には全き救を味ふた基督信者は少くないと私は想ひます。しかし半數以上はこれを得て居らぬと思ひます。もし私は諸君に向ひ、「其を得なさいましたか」と問るなれば、諸君は多分「君は如何いふ意味で言はるゝか私には分りません、それは一體何ですか」と問るでありませう。此度の集會の大目的は諸君をして、此全き救は今諸君の爲に備へられ、神は諸君に之を經驗せしめんとして居給ふ事を知らしめ、諸君がもし其を有て居らないとすれば、有ずに居る事が如何に恐るべきものであるか、如何すれば其恐るべき生涯より正しき生涯にこれから入る事が出來るかを知らせたいといふのであります。オー此經驗を握つて居らぬ人々は謙遜て「オー天の父よこの全き救の全き喜悅に僕を入れた

まへ」と祈るべきです。

第一、神の子等の有る高き特權。

第二、神の子等の低級の經驗。

第三、此大差別の原因。

第四、恢復の途と全き救を得る方法。

第一に知るべき事は、かの兄息子が父と偕に居たのであるから、彼が望むならばこの特權を有して居たといふ事であります。即ち斷ざる交際と無限の組合であります。しかし彼はかの放蕩息子よりも惡つたのであります。彼は常に父の家庭に居りながら、彼の有である特權を知もせず、喜びもせず、諒解もしなかつたのであります。この充實せる交際は彼の爲に備へられて居たけれども、彼は之を受て居なかつたのであります。放蕩兒が家よ





り離れて遠國に居りましたが、かの兄息子は家に居り乍ら家の喜樂から遙か離れて居たのでありました。

斷ざる交際。此世の父は其子を愛し、其子が幸福になるのを喜んで居ります。「神は愛なり」。神は其民に御自身の性質を分與ふる事を悅んで居給ひます。多の人々は神が其聖顏を蔽し給ふ事があると申しますが、神をしてかくなさしむる原因は二あります、即ち罪と不信仰であります。其以外にありません。輝くのは太陽の性質であつて、其は輝かずに居られないのであります。「神は愛なり」。嚴肅に申しますが、神は愛さずに居られないのであります。不義なる者に對する神の憐憫、失敗者に對する神の同情が顯れますが、父としての神の愛のみは其子等に對して顯はれます。「常に我と共に在」。しかし諸君は「いつも幸福であつて神と偕に住む事は出來る事

でせうか」と申します。然り、實際です。其に關しては聖書中に澤山の約束があります。希伯來書を御覽なさい。「憚らずして至聖所に入」とあります。ダビデは「エホバはこの幕屋のおくに我をかくし」また「至上者のもとなる隱れたる所に住ふ」と屢々申されました。

私の申上たい事は諸君の神なる主は諸君が斷へず御顏の光の中に住んことを望んで居らせらるゝとの事であります。諸君は諸君の仕事が性質と境遇との爲に礙げらるゝと謂て不平を鳴らすが、其等のものは神よりもつと強きものでありますか。もし諸君が神に來り、神が諸君の中にまた上に輝かんことを求るなれば、神はその如くなし得る事と、また諸君は信者として毎日また終日神の愛の光の中に行み得る事を見また證する事が出來るでありませう。それは全き救であります。「常に主と偕に在といふ事を、





主よ、私は知りませんでした。されば其を喜ぶ事をしませんでした。しかし今は喜んで居ります」。

無限の組合—「我所有は皆なんぢの屬なり」。兄息子は父が放蕩兒を再び家に入て饗應をなし、其復歸を喜んだ事について不平を鳴らし、また「我友と樂む爲に羔をも與し事なし」と苦情を言ました。父は其愛の柔和を以て「子よ、爾は常に我家に居るが故に求めさへすれば爾の求るところ願ふ所のものを悉く與ふるのである」と答へます。これは卽ち私共の天の父が其子等に告る所のものであります。しかし諸君はかく申すでせう、「私は餘り弱く、自分の罪に勝つ事が出來ません。眞面目にやつて行けません、これも出來ません、あれも出來ません」と。しかし神には出來ます。何時も主は諸君にかく宣ひます、「我所有は皆なんぢの屬なり、基督にあり

て我これを汝に與へん。靈の凡の能と智慧と基督の凡の富と父の凡の愛とを爾に與へん。我有る物の中に爾の屬ならざる物なし。我は神として爾を愛し、爾を護り、爾を惠むところの神なり」、神はかく宣ひます。しかしこれは或人には夢のやうに見えます。何故に諸君はそんなに貧弱でありますか。神の聖言は確です。神はこれらの事を約束なし給ふたではありませんか。約翰傳十四章から十六章を見ますれば、私共は耶蘇の名に由て來り、主の中に居るなれば祈禱が驚くべく答へらるゝ事を知る事が出來ます。かゝる生涯を送る事は基督信者にとりて出來る事であると果して信ずべきでせうか。

今まで私共は凡の人に與へられたる此高き特權について學びましたが、これから第二の點について考へたいものであります。即ち神の子等の





低級の經驗についてゞあります。其は何でせうか。其は貧困と飢饉の中に生活する事をいふのです。かの兄息子は其父の所有物は皆彼のものであるのに、「羔をも與し事なし」といふ極めて貧しき中に生活したる富る者の子でありました。これは多の神の子等の狀態であります。神は私共をして其滿足る恩惠の中に生活なさしめんとして入らせらるゝのに、これはまた何たる對照でありませうか。

或人に問ねて御覽なさい、喜悅に滿る生涯を送つて居るかと。何故なれば彼等は何時も幸福で又聖くあり得る者と信じて居らぬからであります。彼等は「そんな事をして居ては何も仕事が出來ません」と申します。而して神の恩惠に滿されて居るべき筈の生涯が嘆息と悲嘆と悲哀に滿る者と想像して居るのであります。

私は曾て喜望峯に於て或一人の熱心なる婦人に向ひ、如何ですかと問ねたところが其婦人が答へて申すには、或時は輝き、或時は暗いと申し、自然界に於ても斯様であるから恩惠の國に於ても同じであると論じ出しました。かく彼女は悲慘な經驗に陷つて居たのであります。私は聖書を見ますれば信者の經驗中に夜や暗黑があるとは思ひません。反つて「なんぢの日は再び落ず」と書いてあります。しかし自分等の爲に善物といふものが無いと實際信じて居る多の人があります。私は既に申上げました通り罪と不信とを除いては私共より神を隱す物が一もないのであります。若し諸君が靈的貧困に陷り、喜悅もなく、罪にも、惡癖にも、疑惑にも打勝つ勝利の經驗もないとすれば、其は何の爲でせうか。諸君は「私は餘り弱いから倒れるのが當然です」と言ふかも知れません。しかし聖書には神は





「躓かせじと守る」と言て居るではありませんか。或敎役者は私に向ひ、其は神には出來るでせうけれども、其聖句には神が果して其の如くなさる御思召であるか否や判然書て居ないと申されました。愛する諸君よ、神は決して私共を欺しません。もし神がなし得ると申されたなれば其は爲る御思召である證據であります。私共は神の聖言を信じ、私共の經驗が其光のごとくなつて居るか否やを調べるやうにしたいものであります。

なほ諸君は神の爲に働き、實を結んで居るか否や、人々は諸君の生涯を見て「神はかの人と偕に在り、彼を謙遜に、聖くまた天の事を念ふやうになし居給ふ」と言ひ得るや否や、また彼等は諸君を視て、諸君は普通の基督信者で、直に怒り、世俗的で、また天の事を念ない人と言はざるを得ないやうになつて居るか否やと吟味すべきであります。兄弟よ、かゝる生涯

は神が諸君に求めて居るものでありません。私共には富る父がありま
す。此世の父は其子が身に襤褸を纏ひ、破靴を穿き居る事を欲ぬやうに、天
の父も好み給ひません。しかし最高又最良の恩惠を以て私共の生涯を滿
したく望んで居給ひます。多の日曜學校の教師等は其生徒を教へ教へて、
生徒が悔改に至らん事を望んで居ります。しかし彼等は其が爲に神が彼
等を用ひ給ふのであると言得ないのであります。彼等は神と親しく交る事
も、罪に打勝つ事も、世人を悔改に導く能をも實驗して居りません。諸
君は孰の級に屬して居りますか。低級の方ですか。或は充分滿されて居る
方ですか、今日それを明言なさい。これらの二人の子は基督信者に二種あ
ることを示して居るのであります。墮落したる放蕩兒と、神との親しき交
際から離れた兄息子であります。二人とも貧困であります。兄息子の方も





放蕩兒と同じく大變化を要します。即ち彼も悔改をなし、告白をなし、
其高き特權を要求すべきであります。その如く凡の低級の基督信者は悔
改め、告白し、また全き救を要求すべきであります。おゝ諸君は兩方とも
今日神の許に來りて「父よ我罪を犯したり」と言ふべきであります。
そこで今私が問ひたい事は此恐るべき差別の原因は何であるかといふ
事であります。如何してかく違つた經驗を有するのでありませうか。「私
が此全き救を樂しんで居らぬのは何が爲だらうか。神の聖言には然ある
し、人も然言ふし、私はまた其中に生活して居る人をも知て居るが、何
の爲だらうか」と自ら質問して見なさい。而して神に來り、「主よ主の欲み
給ふ生涯に私の入る事が出來ないのは何故でせうか」と問ねて見なさい。
然らば諸君は今の御話の中に其答を見出す事が出來ます。兄息子は子供

らしい心を有ずに、其父について誤つた思想を有て居ました。諸君が若し父なる神の眞の御性格を呑込で居るなれば諸君の生涯は申分ない筈であります。しかし諸君は「我父は富る者でありながら、私には友と樂しむ爲に羔だも與へた事がない。私は充分祈禱をしても、神は私に答へてくれない。私は他の人から神は彼等をば滿足せしむるけれども、私には然してくれないといふ事を聞て居る」と言ふでせう。

或教役者は曾て私に向ひ、かゝる生涯は凡の人に出來るものでなく、これは神が悅ぶところの者に其大權によりて與ふるものであると申された事があります。愛する友よ、勿論これは神の大權に屬するものであります。神は其聖旨に循ひて其賜を分ち與へます。私共は悉くパウロであり又ペテロであり得ない者であります。神の右や左の席をば神は其聖旨





に循ひて與へるでせう。しかし前述の生涯は神の大權問題でありません。これは神の子の嗣業の問題であります。天の父は愛に由て凡の神の子が其全き救を實際に經驗するやうにしてあります。此世の肉體の父を見なさい。其子供等は皆年が異つて居ても、其父の笑顏に接する權利を有して居ります。しかし二十歳になる子には五歳の子に與ふるよりも尙多く金を與へ、十五歳の子には三歳の子に話すよりも尙多く話す事があります。彼等に對する愛が同一であり、子として受る特權に變がありません。その如く神が其子供等に對する愛も同じであります。されば神に責任を歸するやうな事をして神を非難しては不可ん。寧ろ「神よ、私は神をば恨んで居りました。私は罪を犯しました。私は一箇の父として私の子供等に對して居たやうに、神が私に對して爲し給ふ事を信じませんでした。私

は嬰兒の如き信仰に缺て居りました」と言ふべきであります。オー君に全き救を與へんとし給ふ神の愛と聖旨と能とを信じなさい。さすれば變化が必ず起る筈であります。

次に恢復の途について考へませう。如何したなれば此衰れなる經驗より脱する事が出來ませうか。放蕩兒は悔改めました。神の子供等も神の御目の中に生活して居ながら神の約束を喜び樂しんで居らぬ事を悔改むべきであります。悔改は大概瞬間的に起るものであります。長引く悔改は長引く頑固であります。基督教會の多の人々は全き救に入るには永年かゝるやうに思ふて居ります。然です、それを自分の手でやろうとすると長くかゝります。然し其は出來る事でありません。若し諸君が神の許に來り神に信じ賴るなれば瞬間に出來ます。神の恩惠により諸君を神に献げなさい。





「何の爲だろう、何の役にも立まい」と申さるゝな。諸君は罪と弱の中に居る人の如く天の父の御手に縋りなさい。さうすれば神は諸君を救ひ出し、其が暗黑より光明に入る一歩である事が分ります。「天の父よ、私は何と憐れなる者でありませう。あなたと偕に居るのにあなたの愛を知らずに居りました」と申しなさい。

私は今日悔改めよとの使命を帶て此處に參りました。未信者に申して居るのでありません。罪を赦さるゝとは如何なる事であるかを知て居る人々に申して居るのであります。諸君は神を恨むといふ罪を犯して居ませんか。何か優れる物を慕ひ、饑渴く如く求めて居ませんか。しからば御出でなさい、悔改めなさい。而して諸君の不信仰の罪を神が抹し給ふ事を信じなさい。其を信じますか。不信仰に由て神を汚しては不可ん、今日來り、

信仰を以て全き救を要求なさい。それから諸君を守つて下さる主に信頼なさい。これは或人には困難に見えます。しかし決して困難でありません。神は常に其光を諸君の上に照し「子よ爾は恒に我と共にあり」と宣ひます。而して諸君が爲す事はたゞ其光の中に住み、其に行む事であります。

私は基督者に二の階級があつて、全き救を喜ぶものと、其を諒解せざる者とがあるといふ事を申しました。若し其が諸君に分らぬならば、其說明を神に求めなさい。しかし若し諒解して居るなれば、其が明白なる御業であるといふ事を記憶して下さい。神の御腕に縋りなさい。神は「皆なんぢの屬なり」と仰せ給ひます。されば諸君は「ハレルヤ、私は信じます、御受いたします。主に全く献げます。神は今御自身を私に與へ給ふと信じます」と申しなさい。





# 第三十三章　爾曹は其枝なり

（約十五〇五）

枝といへば或樹の枝であつても葡萄樹の枝であつても、枝となる事は單純なる事であります。葡萄樹からでも何の樹からでも枝が出て來て、而して生活し、時に至りて實を結びます。枝の責任としては根と幹より液汁と滋養物を取ればよいのであります。私共は聖靈によりて耶蘇基督に對する私共の關係を知りさへすれば、私共の動作は此地上に於て最も輝ける又最も天的のものに變らされるのであります。されば靈魂が衰へ果る代りに、私共の動作は主耶蘇に結び付く事によりて新しき經驗に入るのであります。しかるに私共の動作が私共と主耶蘇との間を離らす

といふ事があります。何と愚なる事でありませんか。主が自分の中に爲し又自分が主の爲になす所の其動作が自分を基督より離らすようになるのであります。葡萄園に於る多の働人が餘り澤山の仕事を爲すために主耶蘇と交る時がなくなり、其平常爲す所の仕事が祈禱の邪魔になり、また人と餘り繁く交際する爲に靈的生涯が暗くなつたといふて不平を言ふて居ります。實を結ぶといふ事が、葡萄樹から枝を引離すといふ事になるは悲しき事であります。其理由は實を結ぶ枝よりももつと動作に眼をつくる爲であります。どうか神によりて基督者の生涯につけるがゝる誤れる思想から救はれたいものであります。

今此福なる枝の生涯について數言申上げたいと思ひます。

第一に申上げたい事は、此生涯は全く服從の生涯であるといふ事であり





ます。枝には何もありません、其は何事でも葡萄樹に繋つて居ればよいのであります。絶對の服從といふ言は言の中で最も嚴肅であり、大きくあり、また貴きものであります。數年前或獨逸の大神學者が二冊の大なる本を書きまして、カルビン神學の全部は神に絶對に服從するといふ一事で總括が出來ると申されましたが、其言は眞であります。諸君がもし毎日間斷なく神に服從する事を學ぶ事が出來ますなれば、何事でも都合よく行くでありませう。若し諸君が絶對的に神に服從するなれば、いや高き生涯に入る事が出來るでありませう。

私は仕事をしやうとする時、說敎し或は聖書講演をせんとする時、又は出行て可哀相なる人々を訪問せんとする時に、其行爲の一切の責任を基督に歸すべきものと承知しなければなりますまいか。

其は正しく基督が君に要求するところのものであります。君の一切の行爲に關する其根據は單純であつて、且惠れたる意識卽ち基督は一切の事に御注意下さるといふ事でなければなりません。

如何にせば主はかゝる服從に入るやうになし給ひませうか。主は聖靈によりて此くなし給ひます。これを特別なる賜として時々與へ給ふのでなく、葡萄樹と枝の間に於る關係のごとく、時々刻々斷えず與へ給ふ聖靈によるので、生命の繫が續けられるのであります。液汁は時によりて出たり止つたりするのでなく、時々刻々間斷なく液汁が樹から枝へと流れ込むのであります。恰當その如く主耶蘇は私共を一箇の働き人としての福なる地位に居らせたく思ふて入らせられます。而して日々に夜々に、歩一歩何事を爲すにも主の許に行き、主の聖前に居り、自分としては何も知らず





空しき者又何をも爲し能はざる者であるといふ單純で而して全く無能の者であるといふ所に居る事を主は望み給ふのであります。

神に全く服從する事が能を以て働く事の秘訣であります。枝には何もありません。たゞ葡萄樹より受るものあるのみです。諸君も私も主耶蘇より戴くものゝ外に何も有つ事は出來ません。

第二に知りたい事は、枝の生涯が全き服從の生涯のみでなく、深い安息の生涯といふ事であります。おゝあの小い枝を御覽なさい。若しあれが考へたり、感じたり、話したりする事が出來るとすれば——若し今茲に話の出來る枝があるとすれば「葡萄樹の枝さん、私が活る葡萄樹の眞の枝になるには如何すればよいか、私に御話し下さらんか」と問るなれば、何と答へるでせうか。小き枝はかく答へませう、「私は君が賢き人であつて、

多の驚くべき事をなし得る御方である事を存じて居ります。君には君に與へられた力もあり、智慧もあります。しかし君に教へてあげたい事が一つあります。君は基督の御用をつとむる爲に何程急いても努力しても君は成效しません。君にとりて先づ必要なる事は君の主耶蘇の許に來り、主にありて安んずる事であります。私は其をやつて居るのであります。私はあの葡萄樹から生れ出てから數年を經過しました。其間私の爲した事はたゞ葡萄樹の中に息むといふ事であります。春が來ました時には私は何もとやかく心配しませんでした。葡萄樹の方で私に液汁をつぎこんで、蕾も葉も出るやうにしてくれました。夏が來ましても私は別に心配しません。如何な暑い時でも、私は私を新鮮にするために私に露を送り來る葡萄樹を信じて居りました。秋になりましては所有主が來りて葡萄





を摘み取に來ました。けれども私は氣にかけませんでした。若し葡萄の中には惡いのもあつたにしても、所有主は決して枝を責めませんでした。其責任は葡萄樹にあつたのです。君はもし基督即ち活る葡萄樹の眞の枝でありたいならば、彼の中に息みなさい。而して基督に責任を有ていたゞきなさい」。

然すると諸君は「基督に責任を歸するといふ事は私共を怠惰者に爲はしますまいか」と申さるゝでせう。決して然でありません。活る基督に安息するといふ事を學んだ人は決して怠惰者になりません。何故なれば基督と親密になればなる程その熱心と愛の靈は諸君の上に來るからであります。全き服從に深き安息を加へて働きなさい。或人は時として基督に服從する事を勉めます、けれども此絶對の服從といふ事について苦みます。

かゝる人は勉めて見るけれども眞に達し得ません。かゝる人は宣しく日々全く息むといか所に入ればよいのであります。

智慧と力を與へ給ふ基督にありて息みなさい。君は此安息なるものが君の使命の最良の部である事を如何して證據立るかを御存知ありますまい。君は人に接し、人と議論しますが、先方では只自分と論爭する人があると思ふのであります。先方では只互に相語つて居る二箇の人があると感ずるのみであります。しかし君は神の深き安息をして君の上に來らしめるなれば、即ち耶蘇基督の安息と天來の平和と平安と聖潔が來るなれば、其安息は心に談る言以上に恩惠を持來るものであります。

第三に申上る事は、枝は多の實を結ぶといふ事を敎ふる事であります。主耶蘇は其譬喩の中に屢々實といふ言を仰せられました。主は最初に實に





ついて、次に繁く結ぶ實について、其次に多の實について語られました。然です、諸君は單に實を結ぶばかりでなく、多の實を結ぶべきであります。「爾曹多の實を結ばゞ我父これに由て榮をうく」とあります。初に基督は「我は葡萄樹わが父は農夫なり」と仰せられました。基督と其枝との關係について注意なさる御方は神であります。されば私共が實を結ぶのは神の能により基督に由る事であります。

おゝ基督信者がたよ、諸君は此世が敎役者の不足の爲に滅亡つゝある事を御存知でせう。これは敎役者がもつと澤山あればよいといふのでありません。もつと熱心なる敎役者が要るのであります。尙多の敎役者でなく、敎役者が新なる力とこれまでと異つたる生涯を送ることを求るのであります。さすれば敎役者はなほ多の恩惠を人々に傳へる筈であります。

何が缺乏して居るのでありませうか。教役者と天の葡萄樹との間に密接なる關係がないのが缺點であります。天の葡萄樹なる基督は滅亡び行く幾萬といふ靈魂に沃ぎ得る恩惠を有て居る御方であります。また此葡萄樹は天の葡萄を供給し得る能力を有て居られます。しかし「爾曹は其枝なり」とありますから、諸君は耶蘇基督と密接なる關係を有して居らなければ天の實を結ぶ事が出來ません。

仕事と實とを混同しては不可ん。基督の爲にする仕事は澤山ありませう。しかし其は天の葡萄樹の實ではありません。仕事ばかりを求めなさるな。此實を結ぶといふ問題を査べて御覽なさい。之は神の御子の心の中にある生命其物、能力其物、靈其物、愛其物であつて、實に諸君の心と私の心に來る天の葡萄樹彼御自身であります。





天の葡萄樹に密着してかく申しなさい、主耶蘇よ、御自身より流れ來る液汁と御自身の生命の靈の外に私は何も求めません。主耶蘇よ、主の靈をして我中に流れしめ、主の爲に仕事をなさしめ給はんことを祈ると。

私が再び諸君に告げたい事は天の葡萄樹の液汁は聖靈そのもので、聖靈は天の葡萄樹の生命であるといふ事であります。諸君が基督より受るところのものは聖靈の強い流であります。諸君は其を澤山要するもので、其以外に必要なものがありません。これを憶えて下さい。此處に力が少し、彼處に恩惠が少し、あの處に助が少し必要であるからとて基督を求めてはなりません。葡萄樹は其枝に其特別なる液汁を與ふる働を爲す如く、基督は諸君の心に聖靈を與へ給ひます。それによりて諸君は多の實を結ぶ事が出來ます。諸君は實を結ぶやうになり、而して基督の譬の中にある多の實

といふ言に注意して多の實を結ぶ爲に、諸君の生活と心の中にもつと主耶蘇を要するといふ事を記憶して下さい。

第四に申上る事は、枝の生活は親密なる交際の生活であるといふ事であります。枝が爲すべき事は何であるか。諸君は基督の無限に貴き言である○○居るの言を御存知でせう。諸君の生涯は居る生涯であるべきです。其は葡萄樹に於る枝のごとく間斷なく居る事であるべきです。枝の中には一月より十二月まで間斷なく葡萄樹に密着して居るのがあります。毎日そんな生活が出來ますかと問ぬる事は實に恐るべき事であります。その生活は天の葡萄樹に間斷なく居るといふ事であります「しかし私は他の事で隙がありません」と諸君は申すかも知れません。諸君は毎日十時間働いて、頭は其時々の事で一杯になるでせう。神は然するのです。しかし彼に居るとい





ふ仕事は心の仕事で、頭の仕事でありません。其は心が主耶蘇に結び付き又彼の中に安息する事で、聖靈が私共を耶蘇基督に結びつくる働であります。おゝ頭よりももつと深く下りて内的生活にまで達し、基督の中に住むといふ事を信じなさい。されば何時でも自由で、讃むべき主耶蘇よ、我は爾の中にありとの自覺が來るのであります。諸君がもし暫らく他の仕事を傍に置て、天の葡萄樹に連り居るといふ所に入るなれば實を結ぶやうになるのであります。

此連り居るといふ事は私共の生涯にあてはむれば如何なる事でせうか。其は祈禱に於て基督と親しき交際に入るといふ事であります。信者の中には高尚なる生涯を慕ひ居る者、時としては大なる恩惠を受たる者、又時には天の喜悅の大潮流を見出したる者があります。しかし其は一時的の

ものであります。かゝる人々は基督と親しく個人的に交る事が、日々の生活にとりて絶對的に必要なる事を諒解せざる人々であります。獨りで基督と偕に居るために勉めなさい。諸君が幸福にしてかつ聖い基督者となる道は、天の中、地の上に於て此外にないのであります。

多の基督信者は獨り神と偕にある事を以て重荷のやうに、税金や義務のやうに又困難の事のやうに思ふて居ります。かゝる事が何處に於ても基督信者の生活にとりて大なる障害であります。私共はもつと神と靜なる交際をしなければなりません。私は諸君に天の葡萄樹の名によりて告げたい事は、諸君が神と交る時をもつと多く有なれば健全なる枝即ち天の液汁が流るゝ所の枝となる事が出來ないといふ事であります。諸君は獨り神と偕に居る爲に時間を割くことを好まず、主をして諸君の中に働かしめ給





ふ時を主に與へず、また諸君と主との間にある繫を保つ事をしなければ、主は諸君に其不斷の交際といふ恩惠を諸君に與へ給は無のであります。耶蘇基督は彼と親密なる交際の中に生活する事を諸君に要求なさいます。凡の人をして「おゝ基督よ、我望は其なり、我選は其なり」と言はしめよ、しからば主は喜んで其を諸君に與へ給ひます。

最後に申上たい事は、枝の生涯は全き服從の生涯であるといふ事です。全き服從といふ此語は大にして且嚴肅なる言であります。私共は其を諒解して居ら無と思ひます。しかし小き枝は其を宣傳へて居ります。「小き枝よ、汝は實を結ぶ以外に何か爲す事ありや」と問ぬるなれば「否何もなし」と答へ、「汝は何か爲し得るや」と問へば、何にも適しないと答へませう。聖書には葡萄樹は木釘にもならず、外何の役にも立ず、只火で燒くのみで

あると記してあります。「小き枝よ、葡萄樹に對する爾の關係は如何なるものなるかを諒解せしや」「我關係はこれなり、即我は全く葡萄樹に從ひ、葡萄樹は其望むが儘に多少の液汁を我に與へ得るなり。我はたゞ其指圖にしたがひ、葡萄樹は其好むところを我と偕に爲すのみなり。」

おゝ私共は主耶蘇基督に對して全き服從をなすべきです。これを明白にする事は最も困難なる事の一で、また説明しなければならぬ最も肝甚なる事の一であります。神に全く献身して「主よ我自らを爾に献ぐるは我願なり」と言ふ事は造作もない事でありません。其は非常に價値のある事で、其によりて豊なる恩惠をいたゞく事が間々ある事であります。しかし茲に靜かに學ぶべき一問題は、全き服從とは何を意味するかといふ事であります。それは基督が己を全く棄て給ひしごとく、私共も基督に對して全く





己を棄る事であります。それは強過る事でありませうか。諸君の中には然思ふ人もありませう。或人はそんな事は決して出來ないと思ひます。基督は絶對的に自己の生命を棄て父の聖旨を行ふの外何をも爲ず、全く父なる神に信頼したる如く、私共も基督を悦ばす事の外に何をも行ぬやうになるべきであります。かゝる事は實際眞であります。耶蘇基督は私共に其靈を吹入れ、私共をして基督の如く神の爲に凡て生活する事によりて受る最高の幸福を得せしめんが爲に來り給ひました。おゝ愛する兄弟等よ、其は然とすれば、私の申したい事は、もし葡萄樹の小き枝でさへ然であるなれば、神の恩惠によりて私も然ありたいといふ事であります。基督が其望むところを私と偕に爲し給ふやうな生涯を私は日々送りたいと願ふて居ります。嗚呼こゝに私共の宗教の根柢に恐るべき誤謬が横

はつて居ります。或人は自分の仕事、家族に對する義務又は市民としての關係がある爲に、これを棄る譯にはゆかぬから、自分としてはかゝる事をば側に置て、先づ宗教に入り、神に奉仕する事を以て自分が罪を犯さずに行く道として取るなれば、神の助によりて之等の義務をも全ふする事が出來ると思ふて居ります。これは不可ん。基督は來り給ふて其御血を以て罪人を買ひ受け給ひました。若し或所に奴隷賣買所があるとして、私は一人の奴隷を買取るとします。さすれば私は其奴隷を其古き境遇から引出して私の家に伴れ來り、私の財産の一として、終日私の命のまゝに働かせます。もし彼が忠實なる者なれば我意を通さず、私慾を求めず、彼の唯一の願は其主人の喜ぶ所をなし、其主人の譽を求る外何もありません。かゝる意味で基督の血にて買はれたる私は、如何にせば我主を悅ば





す事が出來るか、といふ一念で毎日生活すべきであります。

基督者の生涯なるものは、我意を通さうとしつゝ、神の恩惠を求るなら中々困難なるものであります。自分の好む所に從ひて基督信者の生涯を送り、自分自ら計畫をたて、自分で好む仕事をなし、而して主耶蘇に來ていたゞいて、餘り多く罪を犯さないやうに、又餘り惡い者にならぬやうに護つていたゞく事を望んで居る人があります。しかし私共の主耶蘇に對する關係は、全く彼の御指圖に從ひ、毎日主の御許に直に來りて謙遜り、主よ僕に主の聖旨に協はざるもの、又は主の命じ給はざる事ありませぬか、また全く主に献げずに居るものありませぬか、と言ふべきであります。

私共は耐忍びて主の聖前に俟望みますれば、私共と基督との關係は尤も親密になり、而して後には私共の主との交際はこれまで如何に遠ざ

かつて居つたかを知て驚くでありませう。

私は聖潔に關して多の困難がある事や、其に關する意見が同じで無い事をも知つて居ります。しかし何人でも正直に凡の罪より釋されん事を求めて居るとすれば、私にとりては其問題は比較的氣にかゝらぬものであります。しかし一つ恐るゝ事があります。卽ち或人は無意識に、私共は罪なしには居れぬとか、私共は毎日少しは罪をつくるべきだとか、仕方なしに罪をつくるとか、いふ思想と妥協して居る事を屢々見聞する事であります。おゝかゝる人々は眞實神に向ひ、主よ、罪より我を救ひ給へと叫ぶべきであります。自己を全く耶蘇に献げなさい、而して諸君は罪を犯さぬやうになる爲に主に最善をしていただくやうに求めなさい。

終にこれまでの事を一語に纏めて申上げたい。耶蘇基督は「我は葡萄樹、





爾曹は其枝なり」と仰せられました。他の言で申しますれば、我は汝等の爲に自己を全く與へし生る者にして葡萄樹なり、汝等は我を信じ過す事なし、我は天の生命と能に滿る全能の働者なりと。基督信者よ、諸君は主耶蘇基督の枝であります。もし諸君の心の中に、自分は强くして健康なる實を結ぶ枝でなく、自分は主耶蘇と親密なる繫の中に居らず、自分は望ごほり主の中に生活して居らないといふ自覺があるならば、「我は葡萄樹なり、汝等を招きて我に來らしめ、我靈を以て汝等を惠み、汝等を强くし、汝等を滿すべし。葡萄樹なる我は汝等を枝となし、我を汝等に與へたり。子等よ、汝等自身を全く我に與へよ。我なんぢらの爲に自己を全く神に献げたり、我人となり、我は汝等の屬となる爲に汝等の爲に死り。來れ、汝等は我有となるために全く服從せよ」と言ひたまふを聞きなさい。

これに對する私共の應答は何でありませうか。活る基督が私共を取りて、親しく御自身に結びつけ給ふ事は私共の心の底からの祈禱でありたいものです。私共の祈るところは活る葡萄樹なる主は私共ひとりを彼に結びつけ、主は我葡萄樹我は其枝なり、我には外に求むるものなし、今我は永遠の葡萄樹を有りと歌ひつゝ、眞心を以て道を進むことであります。しからば諸君は主と獨りで居る時主を拜し、主を崇め、主に信賴し、主を愛し、主の愛を俟望みなさい。爾は我葡萄樹、我は爾の枝なり。これで澤山です。我靈魂は滿足します。主の聖名に榮光あれ。

神癒終



Printed in Japan

大正十二年六月廿三日印刷
大正十二年六月廿八日發行
昭和九年四月十五日再版發行

定價五拾錢
送料金四錢

神癒奥附

譯者　中田重治
發行人　東京市淀橋區柏木三丁目三九一　清水是非三
印刷人　東京市淀橋區柏木三丁目三八六　小關謙六
印刷所　東京市淀橋區柏木三丁目三八六　ホーリネス教會印刷部

發行所　東京市淀橋區柏木三丁目三九一
東洋宣教會ホーリネス教會出版部
振替口座東京七七八一四番

終

238631